

[総合的な学習の時間]

よりよい生き方を目指す子どもを育てるキャリア教育

ーキャリア教育の視点から見つめ直す総合的な学習の時間ー

田原 早苗*

1 はじめに

(1) 問題の所在

1999年中央教育審議会答申による「学校教育と職業生活の円滑な接続を図るため、望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育（キャリア教育）を、発達段階に応じて実施する必要がある」とする「キャリア教育推進」の提言を受け、2004年には、キャリア教育と進路指導の関連を明示する、『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』（以下、「協力者会議報告書」という）が出される等、小学校段階におけるキャリア教育の実施の重要性は明確である。

当校では、教育目標「ひとりで みんなと さらに ～よりよく生きようとする力～」の具現を目指して、運営3部会を設置し、具体的な取組を進めてきている。しかし、当校の6年生児童をキャリア教育の視点から見つめてみると、6年生の6月に行ったアンケート結果では、「自分が役に立っている」「最高学年としての責任を果たしている」の質問に肯定的評価をした児童は少なく、6年生としての自分に自信も意欲ももてないスタートであった。

このような状況は、児童自身が、学校における自分の有用感を感じる活動を経験したり、味わったりする場面が少ないことに起因しているのではないかと考えた。また、教師がそのような活動を仕組んでいたとしても、それを児童自身が、自分の行動を認知したり、行動の意味や結果をふり返ったりする場面が不足し、自己肯定感や有用感につながらなかったのではないかと考えた。

そこで、自己肯定感が低く、希望をもちづらい子どもたちを「自分の未来を肯定的にとらえ、よりよく生きていこうとする」子どもたちへと変容させるための一つの手だてとして、キャリア教育を取り入れた総合的な学習の時間が有効であると考え、まず、キャリア教育の先行研究から学ぶこととした。

(2) 生き方教育としてのキャリア教育

キャリア教育における先行的な取組を進める沼津市立原東小学校の実践をみると、校内にキャリア教育を位置付けるための様々な意欲的な取組が行われており、本研究を進める手がかりがそこにあると考えた。原東小学校では、2002年度から、キャリア教育に取り組んでいる。原東小学校が考えるキャリア教育は、進学先・就職先を具体的に考えることなく、「勤労観・職業観」を含む「様々な役割を担う場面で対応する力を伸ばす教育」と考え、家庭と社会をつなぐものと位置付けている。具体的な取組としては、

①キャリア教育で目標とする具体的な子どもの姿を低・中・高学年ごとに明示。

②キャリア教育と「総合的な学習の時間」や「生活科」との関連表を作成し、教師間の共通理解を図る。

③教師用の「実践のためのテキスト」を作り、実践を通しながら毎年改善していく。

の3点があげられる。原東小学校の実践は、小学校におけるキャリア教育のパイオニア的存在として高く評価できるが、当校の求める「よりよい生き方を目指す」具体的な事例が見えてこない。

そこで、筆者は「機能としてのキャリア教育」という考え方に着目した。三村（2004）は「キャリア教育は教育活動の一つの枠組みではなく、教育活動全体に働きかけていくものであるという見方から『機能』としてとらえていかなければならない。」と述べている。つまり、「キャリア教育を行う」とは、キャリア教育の視点を教育活動に取り入れ、再構成した教育活動を実践することであり、その結果、学校での学びと児童の将来の生き方が強く結びついた教

* 糸魚川市立大野小学校

育が実現すると捉えた。

三村は（2004）、前述の中央教育審議会答申での提言や協力者会議報告書を見直し、「児童一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と示した。また、キャリア教育の定義を、「それぞれの人生を歩いてきた個人が、これから歩む人生を社会の中でより自分らしく歩んでいくにはどうしたらよいかを考え、行動することを支援する教育」としている。つまり、キャリア教育とは、「夢や選択肢を広げて考えることの楽しさ、自分の可能性を広げる（気付く）ことの楽しさを味わうことによって、これからの自分に希望をもつことができる教育」、つまり、「よりよい生き方」を目指す子どもを育てる教育と考えた。

以上のことから、「よりよい生き方を目指す」児童の育成には、まず、キャリア教育の4能力領域と総合的な学習の時間がより密に補完し合う活動計画が必要だと考えた。そこで、本研究では、キャリア教育の視点から構成された年間指導計画を作成し、授業実践を試みることにした。

2 研究の目的

よりよい生き方を目指す子どもを育てるために、キャリア教育を機能させた総合的な学習の時間の年間活動計画を作成し、実践することを通して、児童の「自己肯定感」「自己有用感」や「自分の未来に希望をもちよりよく生きていこうとする意識」が、どのように変容していくかを検証する。

3 研究の方法

本研究では、よりよい生き方を目指す子どもを育成するため、キャリア教育の視点から構成された総合的な学習の時間を通して、児童の姿の変容に焦点をあてて、以下の手順で研究を進める。

- (1) 職業観を育てるための活動構成についての検証
- (2) 勤労観を育てるための活動構成についての検証

以上の2観点から構成された学習活動を通して、「自己肯定感」「自己有用感」を高め、「よりよく」生きていこうとする児童が育成され则认为る。

なお、三村（2004）は、小学校段階での勤労観・職業観を次のように定義している。

- 「勤労観」…日常生活の中での役割の理解や考え方や役割を果たそうとする態度・およびその役割を果たす意味やその内容についての考え方
- 「職業観」…職業についての理解や考え方や職業に就こうとする態度、および職業を通して果たす役割の意味やその内容についての考え方

4 実践の内容

(1) 6学年における年間活動計画の実際

6学年における総合的な学習の時間の年間活動計画を次のように設定した。目指す子どもの姿を「職業や仕事に関する調査活動や働く人々とすすんでかわり、自分の夢を探しながら、よりよい自分に向かって努力する子」と設定した。

	目指す子どもの姿	主な活動内容
1 学 期	○自己肯定感を高める。 ○自分の夢について考え、将来の自分を想像する。 ○6年生としての自覚をもつ。	○「自分さがし」のエクササイズを行う。 ○「夢の職業」を設定し、その職業についての情報を収集し、実際にその職業を体験する。○「夢マップ」「夢の設計図」の作成。 ○最高学年としての責任を自覚するための行事ごとの振り返り活動
2 学 期	○様々な職業についての情報を得て、「仕事する」意義についての考えを深める。	○職場訪問での実際の仕事の体験や働く人々へのインタビュー活動、訪問後のまとめの活動を通して、「働くことの意義」や「仕事するために必要な力」などについて考える。
3 学 期	○6年生としての責任を果たし、「自己有用感」を実感し、「自己肯定感」を高め、よりよい自分を目指す。 ○自分の将来への夢と希望をもつ。	○「働くことの意義」や「働くために必要な力」は、学校生活における6年生としての役割を果たすためにも必要な視点であることに気付き、具体的な行動を考え実行しようとする。 ○夢の設計図3の作成

(2) 職業観を育む活動構成

① 『自分の夢マップ』から『夢の設計図』づくり

6年生になった4月。自分の夢のイメージマップを作成した。ところが、1年後にこうありたい、または、将来こうなりたいと願う自分を想像できない児童が多かった。

そこで、まず、『13歳のハローワーク』から、自分の興味のある仕事をピックアップし、マップを作成していった。

図1 『夢マップ』

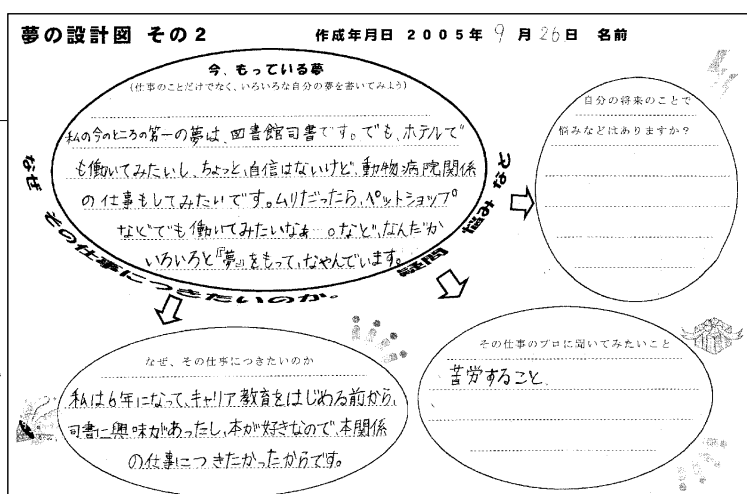
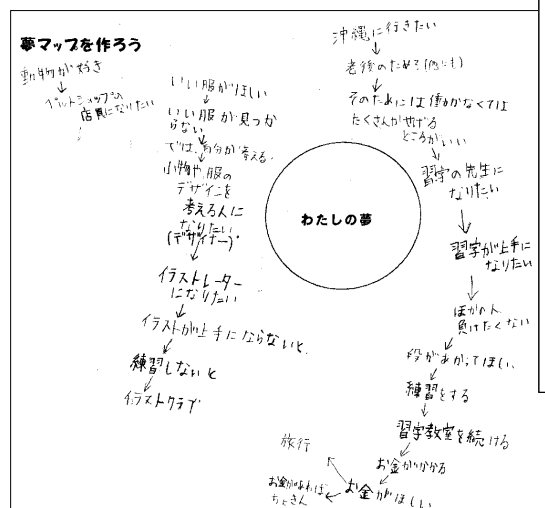


図2 『夢の設計図2』

初めは、自分について、また自分の夢について白紙の状態の児童が多かったが、様々な活動を経験し、イメージマップの作成を重ねる中で、その夢の形を明らかにしていくことができた。また、「夢マップ」から「夢の設計図」へと、より自分の夢を具体化させるため、ワークシートの形式を変えながら取り組ませた。「夢の設計図」はNo.3まで作成した。設計図の回数を重ねるごとに、自分や自分の夢への希望をふくらませていく姿が見られた。

② 子どもハローワーク

なかなか将来の夢をもてない子どもたちに、実際の職業・会社の様子を具体的に提示し、興味・関心を高める必要があると考え、NPO「若者支援プランネット」を活用し、ゲストティチャーとして授業を行っていただいた。その後、児童が、今もっている夢についての進路指導をしていただく授業を構成した。

〈1時間目〉化粧品会社の仕事内容を中心にした実際の会社のシステム・仕事についての説明

〈2時間目〉「こどもハローワーク」

「スポーツ」「お菓子作り」「ホテル関係」「IT関連」の4つのグループに分かれ、その仕事に就くための資質や能力、就くための方法などについて説明を受け、質問に答えてもらった。

これらの活動により、今まで漠然と考えていた夢が、にわかに具体性を帯びてきた。そのことによって、「夢」は現実になるものとしてみることに気付いていった。

また、子どもの周りには、「職業」や「仕事」に関するたくさんの情報があふれているが、子どもたちにとって、それらの情報は現実味のない情報である。この活動によって今の自分と自分が生きている社会は、とても身近なものであることに気付かせることができたと思う。

③ 繰り返し行う職場訪問

「こどもハローワーク」を経験し、自分の夢がもしかしたら実現するかもしれないという希望をもち始めた子どもたちに、「一流の仕事」「仕事のプロ」と出会う経験をする中で、「仕事」や「仕事をする事」にあこがれをもたせ、「仕事をする事の意味」について考えさせたいと考えた。また、一つの仕事に縛られることなく、社会には多種多様な仕事があることにも気付かせたいというねらいもあった。

〈東京での企業訪問〉

東京への修学旅行では、自分の夢の職業に関連する企業への訪問を計画した。訪問先は、以下の5社である。

訪問企業名	企業訪問での気付き →キーワードでまとめる
資生堂パーラー	お客様に喜んでもらうために、新しい商品の開発を怠らない。→お客様のために
日本IBM	あいさつなどの礼儀も大切にしている。→チームワーク
モルテン	一流の商品作りを目指している。→チームワーク
ホテルヒルトン	お客様に喜んでもらうための様々な工夫をしている。→お客様のために
アドビシステムズ	いい仕事をするためには努力を惜しまない。 →努力・一生懸命

初めて見る、大企業の様子に圧倒されながら、また、仕事の大変さを目の当たりにしながらも「こんなところで働いてみたい。」「カッコいい。自分にもできるかな。」と、大きな希望をもつことができた。

〈糸魚川での職場訪問〉

次に、地元の企業に職場訪問に行く計画を立てた。訪問先は、児童が自分の「夢」に選んだ職業を全て網羅できるように設定した。その結果12カ所への職場訪問を実施し、児童一人あたり4～5カ所への訪問を経験することができた。訪問先では、基本的に仕事を体験させていただけるようお願いをした。

〈働くことの意義〉

東京・糸魚川での職場訪問を通して、児童は「働くことの意義」について考えを深めていった。それらを「働くために必要なキーワード」として、まとめていった。

働くために必要なキーワード	そのキーワードを選択した理由
お客様のために	お金のためだけでなく、相手のことを考えて商品を作ったり、売ったりすることが大切。お客様にお礼を言ってもらったとき、やりがいを感じる。
信頼・責任	仕事をしていく上で、相手からの信頼をもらうことは簡単ではない。信頼してもらうために自分の責任を果たす。信頼を得たとき大きな喜びを感じる。
チームワーク	チームワークがなければ、大きなことは達成できない。一人ではなくみんなの力を信じて仕事をしていく。やり遂げたときの達成感から感じる喜びは大きい。
みんなのために	自分の仕事は、社会の人たちの何らかの役に立っていると信じて、また、その意気込みで仕事をする
一生懸命	見返りや成果だけを気にして仕事するのではなく、ひたすらその仕事をする。

1学期の東京での企業訪問時には、まだ、「働くことの意義」など考えたこともなかったが、いくつもの職場を訪問し、そこで働く人々の「プロ意識」やその人にとっての「働くことの意味」や仕事に対するこだわりに接することによって、大人は何のために働くのか。という勤労観・職業観と深くかかわる学びが形成されていったことが、キーワードから読み取れる。

また、複数の職場での体験は、まだ、一つに絞る段階ではない「将来の職業」を、確認・探求し、広げるためにも有効な手だてであった。

特筆すべきは、「あこがれの存在」としての大人たちに出会えたことである。複数の職場体験を経験しながら、その場所が自分に適した仕事かどうかを判断するより、仕事のプロとして真剣にその仕事に正対する大人たちの姿に憧れていった。また、そんな大人になりたいとあこがれていった。

(3) 勤労観を育む活動構成

① めあてキーワードの設定

1年間を通して、毎学期ごとに「6年生としての生活のめあて」を設定した。常にめあてを意識できるよう、めあてをキーワード化し、教室の後ろに掲示した。毎学期の終了時には、数ヶ月間の自分の6年生としての行動を振り返り、めあてが達成できたかどうかの自己評価を行った。その反省をもとに、新学期に新キーワードを決定していった。

2学期の終わりには、自分たちのめあてと職場訪問でみつけた「働くために必要なキーワード」が同じであることに気付き、大人の仕事は特別なことではなく、自分たちの学校生活の延長線上にあることに気付いた。

職場訪問で見てきた、あこがれの「大人」の姿は、そのまま最高学年としての自分たちのあるべき姿であった。

② 6 年生日記の継続

めあてキーワードは、学期の初めと終わりに見つめるだけでは、常に意識した行動へと結びつかない。そこで、日常の自分の考えや行動を振り返るための手だてとして「6 年生日記」を書く時間を設定した。「6 年生日記」は個人で記入する作文であるが、学級だよりに載せることによって、クラス全員の日記を読み合い、お互いの考えを共有し合うことができた。

友達の日記を読むことによって、自分と同じ考えをもっていることに安心をしたり、自分とは全く違うもののとらえ方に、揺さぶられたりしていた。「6 年生日記」を通して、「6 年生としてのあるべき姿」が、クラスの世論として形成されていった。

③ 伝統引き継ぎ式

卒業式を間近に控えた 3 月。恒例の「6 年生を送る会」が 5 年生の計画で進んでいた。「6 年生を送る会」のめあてに、「自分たちの学校の伝統を引き継ごう」という内容があったが、「自分たちの学校の伝統」が何かを明確に答えられる子はいなかった。そこで、6 年生で「自分たちの学校の伝統」について話し合う場を設定し、自分たちが今年 1 年引き継いできた「伝統」は何だったのかと、自分たちの歩いてきた 1 年間の道のりを振り返る活動に入った。

「伝統」つまり、子どもたちが 1 年間がんばってきた成果・結果は次の 5 点である。

伝 統	選 ん だ 理 由
あいさつのよさ	朝から気持ちのいいあいさつを交わせる学校である。
団結力	運動会やもちつき大会など、みんなの力を出し合って協力し合えるまとまりがある。
責任	特に 6 年生として必要な力。自分の役割をしっかりと果たすこと。それを下学年が見ている。
約束を守る	1 年生であっても 6 年生であっても学校の決まりや社会のきまりを守っている。
振り返る	次の行動をよりよくするために、自分の行動を振り返り、生かしている。

この 5 つの「伝統」を 5 年生に引き継ぎ、自分たちの 1 年間の行動が全校のみんなのお手本になっていたことを実感していた。自分たちの歩いてきた道のり、すなわち自分たちの「キャリア」を見つめ直し、そして、これから歩いていく自分の道を希望をもって考える取組となった。

以上の活動を通して、子どもたちは、6 年生としての自分の役割をきちんと果たすことによって、やり遂げた充実感を味わっていた。

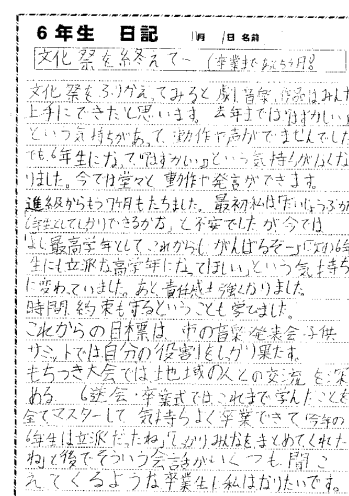


図 3 『6 年生日記』

5 実践の成果と考察

(1) アンケート結果から見る児童の意識の変容

～自己肯定感・自己有用感の育成～

9 月と 12 月に行った 6 年生の児童へのアンケート結果を表 1・2 に示した。「自分は全校の役に立っていると感じる」子どもたちは、時間を経過するごとに増えていることが読み取れる。また、「最高学年として責任をもって仕事ができる」と自信をもって言える、つまり 5 の評価をした児童が半数以上を占めている。この 2 つのアンケート結果からも、キャリア教育の視点から構成された総合的な学習の時間が、「自己肯定感」や「自己有用感」を育むことに有効に働いたと考える。

(2) ワークシートの記述から見る児童の意識の変容

～よりよく生きる姿への変容～

6 年生は、4 月から自分の夢を設定し、その夢を実現するためにはこれからどうしたらいいのか、どんな努力が必要なのかについて、たくさんの職業とのふれあいを

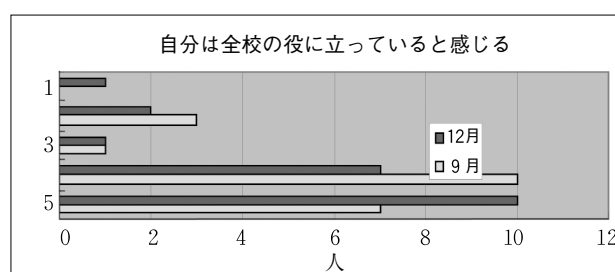


表 1 児童アンケート結果 1

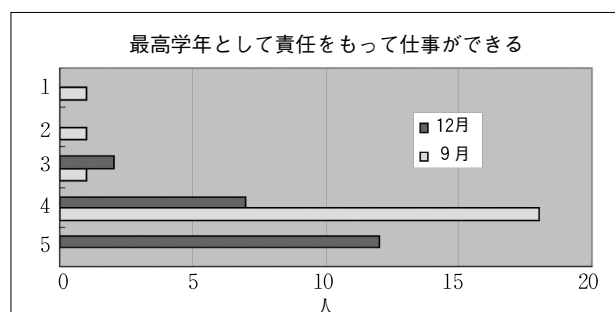


表 2 児童アンケート結果 2

通して考えてきた。それらの活動を重ねる中で、児童は、自分の「夢」を求めてよりよく生きていこうとする姿を見せ始めた。また、職業としての「夢」を実現することだけを目標とせず、「よりよい自分になる」こと自体を目標とする姿も見られるようになった。それは、多くの人とかかわり、そのかかわりから学んだ子どもたちの「キャリア」であったと考える。

4月からずっと持ち続けてきたフラワーデザイナーという夢。初めの頃は、花が好きだからなりたかった。でも、実際に職場体験をして、ただ、花をアレンジするためじゃなくて（中略）よりたくさんの人に喜んでもらえるためにこの仕事をしたいと考えるようになりました。そのためには、たくさんの努力や工夫が必要だということも…。だから、「仕事をする上で必要なキーワード」からわたしの選んだキーワードは、「努力・工夫」です。これから、夢に向かって、いろんなことを努力したり、工夫したりして生きていきたいです。

ぼくは、4月の頃の夢はスポーツ関係の仕事につくことでした。でも、今は、具体的な仕事としての夢はきまっていません。でも、職場訪問を通して、「約束を守る」とか、「人と協力する」とかという「どんな人になりたいか」という夢がもてました。

6 まとめと今後の課題

以上の結果を踏まえ、キャリア教育の視点、つまりキャリア教育を機能させた総合的な学習の時間の取組は、「自分の未来を肯定的にとらえ、よりよく生きていこうとする」児童へと変容するための一つの手だてとして有効であったと考える。

しかし、妥当性や信頼性についてはまだ課題が多い。総合的な学習の時間の評価は数値に表れにくいものだからである。質的に検証を重ねると同時に、より客観的なデータを得るためにも、各教科へとキャリア教育の機能を広げていけるよう進めていきたい。キャリア教育は本来、教育課程の効果的展開を生み出すものであり、各教科のねらいと4能力領域をクロスさせ、指導計画を充実させていくことによって、学力向上への有効な手だてとなる。

また、小学生におけるキャリア発達を測る尺度の開発も強く望まれる。

最後に、キャリア教育の視点から教育活動を見直す作業は、教師自身の授業と子どもを見る目を耕してくれることを実感した。また、見直された教育活動が充実している手応えを感じた。教師も子どもも楽しい総合的な学習の時間になった。教師がキャリア教育を楽しみながら、教育活動に取り組む姿勢が、何より子どもたちに力をつけることになることを、これからも実践を行いながら感じていきたい。

〈引用・参考文献〉

- ・ 国立教育政策研究所生徒指導研究センター：『職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）』 2002年
- ・ 静岡県沼津市立原東小学校工藤榮一（代表）三村隆男共著：『キャリア教育が小学校を変える！沼津市立原東小学校の実践』 実業之日本社、2005年
- ・ 中央教育審議会答申：『初等中等教育と高等教育との接続改善について』 1999年
- ・ 三村隆男：『図解 はじめる小学校キャリア教育』 実業之日本社、2004年
- ・ 村上 龍：『13歳のハローワーク』 幻冬社、2003年
- ・ 文部科学省：『キャリア教育推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』 2004年